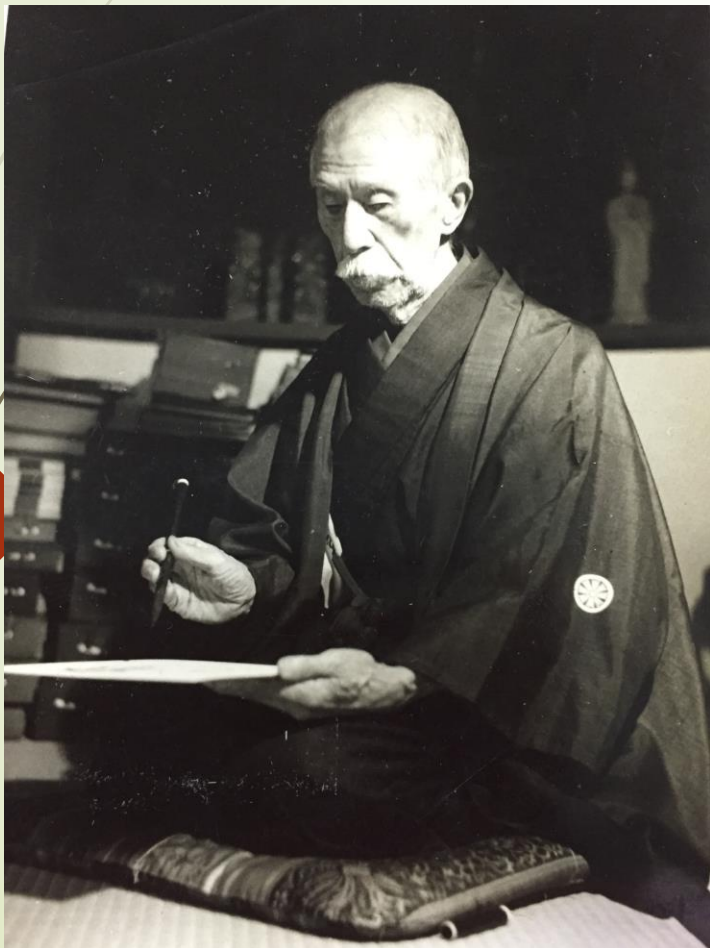


# 蘇江の漢詩人 服部擔風



浅井 厚視

# 服部擔風年譜①

- 1867年（慶応3）11月16日鰺浦村に生まれる。幼名は  
桑之丞（くめのじょう）。大地主の次男。
- 1875年（明治8）鰺浦村濯習学校に入学
- 1882年（明治15）森村大朴（尾張藩儒学者）に師事
- 1884年（明治17）村田梅村主宰の『水月吟社』に入る  
詩学の森春濤一門（一宮）に学ぶ
- 1888年（明治21）永和村より嫁を迎え、分家する。
- 1891年（明治24）土居香国らと『柳城吟社』を創立



森春濤  
と槐南  
親子



## 服部擔風年譜②



- 1893年（明治26）『梅花唱和集』詩壇デビュー
- 1902年（明治35）『藍亭』（書齋）
- 1905年（明治38）『佩蘭（はいらん）吟社』創立。桑名の愛  
宕楼で毎月第3日曜日に『詩学』の講義
- 1908年（明治41）弥富小学校学務委員（以来30年間）
- 1914年（大正3）『興風会』を創立。『菜根譚』講義
- 1916年（大正5）『丙辰吟社』を津島に創立。
- 1918年（大正7）『興風会』を廃し『清心吟社』に。

## 服部擔風年譜③

- 1936年（昭和11） 鮎浦に詩碑を建立『孝忠園』
- 1938年（昭和13） 孝忠園拡張、公園となる
- 1947年（昭和22） 『擔風詩集』全7巻刊行
- 1951年（昭和26） 中日文化賞受賞
- 1953年（昭和28） 日本芸術院賞を受賞。弥富小学校講堂にて祝賀会
- 1959年（昭和34） 伊勢湾台風襲来、蔵書の大半失う。
- 1960年（昭和35） 『服部擔風先生遭難救護会』結成
- 1962年（昭和37） 弥富町名誉町民第1号
- 1964年（昭和39） 5月27日、96歳にて死去

# 服部擔風を育んだ人たち

森村大朴（もりむら  
たいぼく）尾張藩儒  
学頭

名古屋出身。明倫堂  
に入り、儒学を学ぶ。  
1866年、助教授。維  
新の頃に今村（蟹江  
町）で、後に西条  
（大治町）の木犀校  
で漢籍を教える。光  
暁寺境内に頌徳碑。

村田梅村（むらたばい  
そん）津島神社神官  
本名は村田哲、梅村と  
号した。大沼枕山・森  
春濤と並び称された漢  
詩人。水月吟社をおこ  
した。



森春濤・槐南（も  
りしゅんとう か  
いなん）

一宮出身。京都・  
梁川星巖の門人。  
東京へ移住。茉莉  
吟社を結成。『東  
京才人絶句』を編  
纂。槐南は息子。  
伊藤博文の秘書と  
してハルピンに同  
行。軽傷を負う。

## 服部擔風と親交のあった人たち

### 郁達夫（いく たつぷ）

中国人の文学者。小説家。

『沈淪』等多数の著作。大正2年来日。同5年、初めて擔風を訪ね、交流を続ける。後に抗日運動に参加。スマトラで日本憲兵に殺害された。中国政府が認めた革命烈士の一人。



### 伊藤才兵衛（雅風軒才叟さいべえ・さいそう）

塩川村（稲沢市）生。津島町内で茶碗屋。大橋秋二に私淑。昭和8年、津島窯を開く。昭和16年擔風より「雅風軒才叟」の号を受けた。昭和22年、津島神社神苑に「長寿窯」を開き、赤楽の作品を手掛ける。



# 服部擔風の門人たち



## 江上春鷗（定義）

（えがみしゅんおう）

市江村出身の教育者。本名定義。津島尋常高等小学校校長。『海部文華誌』『津島町史』編纂者の一人。津島図書館長「清心吟社」の中心的役割。

## 佐藤蘇水

（さとう そすい）

明治29年～昭和40年。弥富・五明出身。擔風の門人で「清心吟社」の幹事を務める。多くの著作を編集。尋常小学校訓導

丙辰吟社 会場 津島第一尋常高等小学校

大橋強南・小野寺梅丘・佐藤蘇水・江上春鷗 等丙

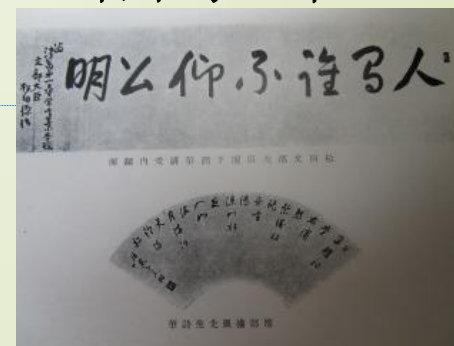
佩蘭（はいらん）吟社

会場 聚芳館

樋口井堂・山田竹園・佐藤蘇水丙

清心吟社 会場 弥富小学校

服部桂谷・江上春鷗・佐藤蘇水



# 『海部文華誌』に記述された服部擔風・江上定義・佐藤蘇水①



序

御親閲を仰いで・「教育報国」を誓いてより既に半歳、今茲に我々の校の多年待望せし、訓育の殿堂たる講堂、新に成り、将来児童教育に新生命を開拓し得るは、慶賀の至りなり。

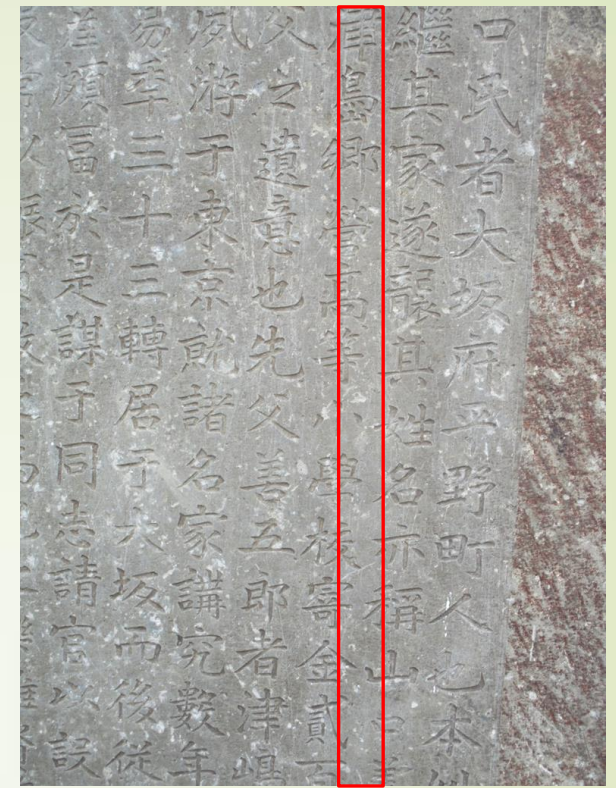
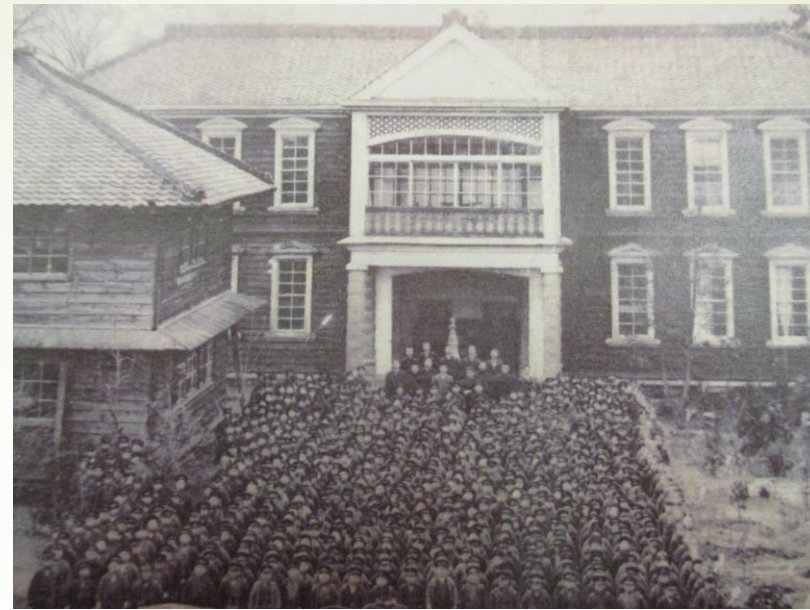
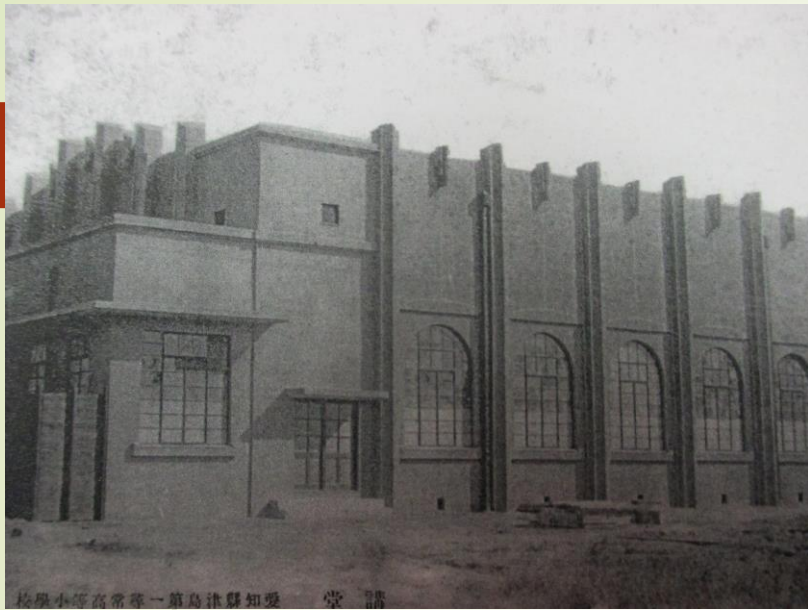
講堂落成を記念すべく、郷土の詩歌、俳句等を集めたる所以のものは、郷土の偉人を敬い、文化を審（つまびらか）にし而して将来の指針となし、益々育英の道に精進せんが為なり。

此の企に大方諸彦より玉稿を寄せられ、且つ服部擔風先生より、「津島詞華」なる題字の命名を忝（かたじけ）ふす・・・特に松田文部大臣閣下には『人間誰不仰公明』の揮毫を賜はり、新講堂に一段の光彩を添ふことを得たるは、衷心より感激措く能はざる所なり。

本調査の短日月完成せるは、訓導佐藤蘇水君の熱心なる努力による。厚く労を謝す。

昭和九年菊花馥（かおり）たる明治節の佳き日 学校長 江上定義





津島第一尋常高等小学校講堂 後に津島町公会堂となりました 昭和9年10月

津島高等小学校校舎 今市場町・明治42年



- 津島南小南西角に立つ碑
- 「山口氏賜金碑」が傾いて立っている。大阪の山口善五郎氏が貳百円の寄附金を津島郷学高等小学校に寄贈したことが記されている。

津島高等小学校は、明治13年（1880）津島村西福寺に設立された陶成学校（教員養成学校）を始めとします。

明治20年（1887）陶成小学校は海東郡海西郡立津島高等小学校（第一高等小学校）となり津島村今市場に、その分校が前々須（弥富）に設けられました。第二高等小学校が蟹江に、第三高等小学校が甚目寺に開校しました。そして明治31年（1898）、津島女子高等小学校が津島高等小学校から独立して、つくられました。



# 津島南小の沿革史 (津島高等小学校の歴史)

明治13年  
1880年

海東西郡共立陶成学校

明治20年  
1887年

第一高等小学校

前ヶ須分校

第二 蟹江

第三 甚目寺

明治21年  
1888年

海東西郡立高等小学校

蟹江分校

甚目寺分校

前ヶ須分校

明治26年  
1893年

海東郡立三十九ヶ町村組合立津島高等小学校

明治36年  
1903年

津島町外十二ヶ村組合立津島高等小学校

津島女子高等小学校 明治31年

明治40年  
1907年

津島町外四ヶ村組合立津島高等小学校

明治42年  
1909年

藤里尋常高等小学校

大正元年  
1912年

津島尋常高等小学校

## 『海部文華誌』に記述された服部擔風・江上定義・佐藤蘇水 ②

○服部擔風と丙辰（へいしん）  
吟社

服部擔風氏の村田梅村に就かれたのは津島以後のことと明治二十年前後、氏の十九歳より二十一歳に至る三ヶ年程であった。梅村去つて後の津島の詩壇は失望落胆闇夜に提灯を失つた様な思ひであった。・・・

幸いにして梅村に就き親しく學ばれた尾張の詩人服部擔風氏を毎日聘して大正五年丙辰春より詩会を開催する事となり漢詩の講義を傾聴し且つ作詩の指導を得たものであった。

丙辰より始めたので此の会合をば丙辰吟社と呼んだ。丙辰吟社は始めは今市場の蓮華寺を会場としていたが、間もなく我が第一校の玄関の二階に催したのであった。丙辰吟社は大正十二年の中頃まで続いていたが會員の転任や死亡や退官などが続出して終に八年にして中絶の止む無きに至った。

# 『海部文華誌』に記述された服部擔風・江上定義・佐藤蘇水③

## 編集後記

津島の詩歌を収集すべく江上校長より命じられた。それは七月の下旬で休暇になる時であった。漢詩、和歌、俳句どれ一つでも容易ではない。そこで八月の休みを利用して詩集や和歌や俳句の本を読むことにした。予定は立てたものの暑いやら蚊が喰うやらで思う様には進まない。

そこで一は故人のものを集めると共に一は現代詩人に依頼して集めることにしたら折角の目的も達せられて意義ある郷土詩歌の研究ができやうと思つた。

早速出校日に校長に御話して賛成を得、激励を得た。茲に方針を定めてもらつたから先づ擔風先生を休み中に訪問してお話を申し色々採集や編輯（へんしゅう）に就いて心得るべき点を承つた。そして先生から色々の詩集を拝借すべき許可を得て之でやれやれと安心した。

この郷土研究物は只短日月の間に調査したものである。講堂落成記念といふのであつたから十月下旬に挙行される落成式までに何とか纏めたいと思つた。

佐藤善之助



# 服部擔風・藍亭・轍

服部 轍  
字 雲  
號 擔風



藍亭

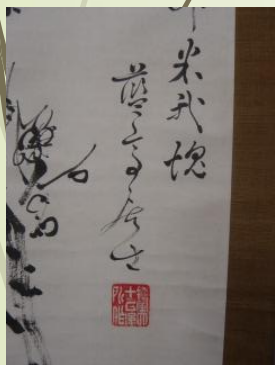
醉芙蓉軒

服部 轍印

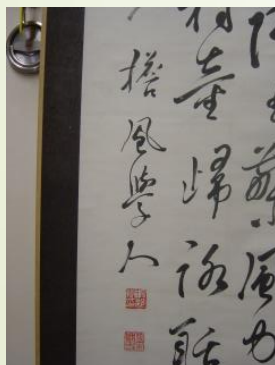
轍



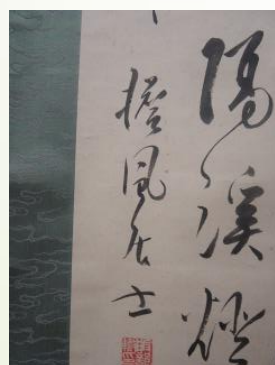
擔風 「握月担風」(名月を握り、清風を肩に担う)  
藍亭 王羲之の「蘭亭」を模した書齋  
轍 蘇軾の弟、蘇轍から  
醉芙蓉軒 藍亭に植えられた芙蓉の花に由来  
白色の八重の大輪が、落ちる前に赤くなる  
ことに由来 ※ 芙蓉 アオイ科の低木



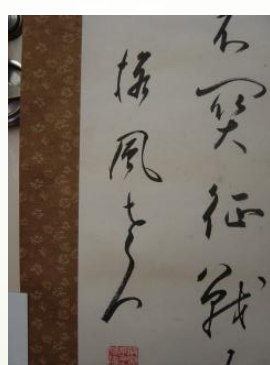
藍亭居士



擔風學人



擔風居士



擔風老人

## 服部擔風と孝忠園

- 孝忠園・・専念寺門前（弥富市鮎浦町）
- 擔風古希（70歳）の『七十述懐』（昭和11年）を門人により建立された詩碑
- 11月15日の除幕式には、五百名以上（詩碑会会員・来賓）が全国から集まった
- 花火で開会、安藤兄弟の飛行機低空飛行（賀詞投下）、式典後の余興では「神楽屋形」が出て「獅子舞」が演じられた
- 記念誌『碑詩唱和』には全国から詩が寄せられ、500名以上の会員と金品を寄贈した120名以上の賛同者が名前を連ねている

※ 『碑詩唱和』後藤琢磨編 担風先生古稀記念詩碑建設会



専念寺・種徳碑・筆塚「永平寺熊沢泰禅書」

「私父母の墳墓に近きこの菩提所門前に建設せられましたのは父母泉下の靈においても定めて喜び居ることと存じます」  
『碑詩唱和』

# 服部擔風の漢詩碑

# 社教センター玄関脇



台閣の功名 画餅の如し  
 操持幸いに 未だ当初に負かず  
 白鷗 春水 亡機久し  
 我も亦 蘇江の一老漁

たいかくのこうみょう がへいのごとし  
 そうじ さいわいに いまだとうしよに  
 そむかず  
 はくおう しゅんすい ぼうきひさし  
 われもまた そこうの いちろうぎよ

臺閣功名畫餅如  
 操持幸未負當初  
 白鷗春水忘機久  
 我又蘇江一老漁

※ 台閣 政府の高位高官  
 ※ 操持 固く心に決める  
 ※ 負かず 自分を裏切ることがない

※白鷗 白い鷗 (かもめ)  
 ※亡機 親しい  
 ※蘇江 川べり